

「やってみる」学びから生まれた 学生のアイデアが地域と人を動かす

千葉商科大学

Chiba University of Commerce

学生の視点から見出した
地域を輝かせる新たな光

春には弘前城の桜、夏にはねぶたまつり。さらには、りんごの生産量日本一を誇るまちである「弘前」。しかしながら、オフシーズンの観光客数は伸び悩み、「ひろさき」ではなく「ひろまえ」などと読まれることも珍しい話ではない。年間を通じた観光客の誘致や知名度の向上は、弘前市長年抱える課題であった。

そんな一地方都市の課題解決に挑んだのは、人間社会学部の朝比奈剛教授と学生たちだった。2014年から農業体験や農家民泊などを通して地域の人々と交流し、現地でフィールドワークを実施。一般的な観光資源だけではない、地域の魅力や隠れた課題を掘り起こしていった。

そこで生まれたのが「愛ひろがひろさき」ほころ 弘前ウエディング」というプランだ。りんごの花言葉である「選ばれた恋」で出会ったカップルが、400年を超える歴史と堅固な石垣をもつ弘前城で結婚式を挙げ、固く長く続く絆を結ぶ。そんなコンセプトのもと、地域資源を活かしながら、弘前の幅広い産業へプラスの効果をもたらす新しいビジネスプランを提案した。

この「弘前ウエディング」プランは、2015年「大学生観光まちづくりコンテスト」（観光庁、文部科学省等が後援）において、青森県知事賞を受賞している。地域の魅力を自分たちの目と足で見出し、それを活用し、ストーリーとして仕上げたプランのもつ強い説得力と可能性が評価された結果であった。

学ぶ、試す、気づく、また学ぶ。
成長を促す学びのサイクル

「人間社会学部のアクティブラーニングは、事前学習とフィールドワーク、そして事後学習のサイクルの繰り返しで成立します。まずは社会やビジネスが抱える課題を教室で学び、その課題を乗り越えるための気づきを現場や実体験から得て、それを再び学問に紐づけ、課題解決をめざす。ただ外に出て体験し、楽しかった、だけで終わらせてはいけません」と、朝比奈教授は言う。理論と実践の繰り返しを学生の成長へとつなげる「やってみる」という学び方、千葉商科大学の学びのテーマでもある。

実際に「弘前ウエディング」は、コンテストの実績だけに留まることなく、



コンテスト受賞当時は、1・2年生3名だけのチームだった



千葉商科大学
人間社会学部 学部長
朝比奈 剛 教授

「全国の大学と競うコンテストで結果を残せたことは、日頃の学びの成果。今後はその実現を目指します」



人間社会学部 3年
堀田 知里 さん

「弘前市の地域資源をウエディングに活用することで活性化に貢献し、地元の期待に応えていきたいです」

“アクティブラーニング”の重要性が広く提唱される以前から「社会で役立つ実学」を学問の中心に据えてきた千葉商科大学。中でも、人間社会学部が設立以来継続してきた“社会で学ぶ”試みが今、地域や企業を動かし始めている。

取材・文／草薙敦子

地域を活性化する人間社会学部の アクティブラーニング

●さんむ田んぼアートプロジェクト

地域活性化とグローバル化を目指した新しい観光コンテンツとして、千葉県山武市と連携したプロジェクトを実施。キャンパスに見立てた田んぼに色とりどりの稲で絵を描き、田植え・鑑賞・収穫を地域住民と一緒にやっている。田んぼアートは、成田空港を行き来する飛行機の中から来日観光客に楽しんでもらうことも意識して制作している。

●真間あんどん祭り

2015年より市川市で毎年開催されている「真間あんどん祭り」。近隣5校に通う小学生が製作した行灯を含む約200個の行灯が真間山弘法寺の参道に並び、光の道で夏の夜を演出する。学生たちは市川市役所や、真間地区商店街、近隣小学校のPTAなどの有志とともに祭りの企画・運営を行い、住民に地域の魅力を再発見してもらおうと奔走している。





(右上・右下)弘前市の関連企業の協力のもと、人前式シーンの撮影が弘前城で行われた (左)りんごをモチーフにしたプロモーションムービーも制作。「別々の種類の木を一つにしておいしいりんごをつくる“接ぎ木”という作業を、出会いを連想させるシーンとして表現しました」(堀田さん)

実現に向かって動き始めている。受賞後すぐに「ぜひ事業化したい」と弘前市長より声がかかり、行政をも巻き込むプロジェクトに発展。地元ホテルなどの観光業界からも「実際に手掛けた」と声があがるほど歓迎を受けている。学生たちの発想と熱意が地域を動かしたのだ。

「弘前ウエディングプロジェクト」は現在、立案メンバーを含む1〜4年生の計15名がビジネス化に向け活動中だ。2017年には弘前市、人間社会学部、一般社団法人CSV開発機構で構成する「弘前ウエディング研究会」が発足。「平成29年度むつ小川原地域・産業振興プロジェクト支援助成事業」にも採択され、事業化に向けた活動がスタートした。弘前市で開催された事業説明会には、地元関連企業約15社が集まり、地元からの期待の高さが窺える。

2017年夏には、プロモーション写真やムービーを制作。新郎役に中心メンバーである人間社会学部4年の中野智仁さん、新婦役には弘前城ミス桜グランプリで弘前大生の八島愛美さんを起用し、弘前城での挙式や、りんご苗木の植樹シーンなどが撮影された。プロデューサー役を務め、映像のプロと共に制作を進めた堀田知里さんは、1年次の立案からこのプランに取り組んできたメンバーの

Information

千葉商科大学



巢鴨高等商業高校(1928年)を前身として1950年に開学。商経学部、政策情報学部、サービス創造学部、人間社会学部、国際教養学部の5学部7学科を擁し、専門的知識と幅広い教養を身につける「実学教育」を展開する。採用意欲の高い企業をネットワーク化した「CUCアライアンス企業」約740社(2018年1月現在)と連携するほか、合同企業セミナーや学内選考会等、企業連携キャリアプログラムも豊富だ。

●DATA

千葉県市川市国府台1-3-1
TEL 047-373-9701 (入学センター)
URL <http://www.cuc.ac.jp/>

教材は人とまち。社会で学ぶ アクティブラーニング

一人だ。「このプロジェクトに参加し、企画を実現するための俯瞰した考え方ができるようにになりました。もつとたくさんの人々を巻き込みながら事業化していけるよう、後輩にしっかりと引き継ぐこともプロジェクトの課題だと思っています」(堀田さん)

人にやさしい社会をビジネスや仕事でつくり出す人財を育てる人間社会学部にとって、「人」と「まち」は格好の教材である。そのため、社会で学ぶアクティブラーニングをふんだんに用意しているのも同学部の特長

だ。例えば、前述の弘前ウエディングをはじめ、さんむ田んぼアートプロジェクト、真間あんどん祭りなど、行政や企業、地域の人々と協働しながら、地域を活性化する多数のプロジェクトを継続的に実践。その経験は学生の「使える知識」となり、社会で生きていく上での力となっていく。

「学生はきっかけを与えて、ちょっと背中を押すだけで驚くほど成長します。また、私たちのアクティブラーニングには、地域や大人が元気になる、企業も本気になる、という効果もあるようです。社会で学ぶ現場で育てる、実学教育において、人間社会学部は最前線にいると自負しています」(朝比奈教授)